紙芝居パリに行く
——その2

堀内誠一
（イラストレーター）

植物園で紙芝居を演じるブルーノ氏

今度はブルーノ氏が街で演ることになった。

なかなか街頭で子どもを集めるというのは難しい（楽器なしだったから）。親たちは直感的にアメでも売りつけられんじゃないかと思って子どもを引っぱって行ってしまう。念のため、ブルーノ氏は視覚芸術の研究家であってアメを売って生活しようとしているわけではない。

私たちはジプシーのようにパリの街をさまよい、植物園に来てやっと、芝生の中で遊んでいたヒッピー風の二組の母子たちに頼むようにして紙芝居を開幕した。

ブルーノ氏は大げさな滑稽詩を朗唱するような調子で、あたり一面の人々をびっくりさせた。子どもたちどころか大人の連中もいっぱい集まってお話に聞き入り、場面がめくられるたんびにいっせいに歓声があがった。大人の中には熱心に紙芝居（ティアー・パピー）についてブルーノ氏に質問したり、協力を申し出る人もいた。

ブルーノ氏は初め、紙芝居をスライドに撮り（細部を拡大するなどしてコマを多くし）音楽をつけて上映したい計画であったが、私はそれは純粋な意味で紙芝居ではないし、紙芝居の特色は、大人と子どもとが触れあうことであると力説したが、それは演ずることを通して充分理解されたことと思う。

また、紙芝居を二、三の出版社に持ち廻り紹介したが、どこでもたいへん興味を示した。

＊　＊

紙芝居は次のような点で今日的な意義を認められ、日本に於いては復興、フランスに於いては発展の契機を持っている。

日本人の手ぶり身ぶりの表情の苦手さ、シャイな感情の故にこそ発達した紙芝居は、今、本来手ぶり身ぶり語を話してきた人たちにも充分利用価値のあるものとなってきた。西欧も近年とみに〝あけすけ〟な表情を対話に失いつつあるからである。例えばイギリスでは先年、タッチ・キャンペーンなるものが行われた。人間関係をホットに回復するためにお互いに体に触れましょう、という運動であり、この場合は多くの人たちの拒否反応があったと報告されている。

絵本は大人が読んでやるべきものだが、そのヒマがないと同時に、近代絵本の発達そのものが、子どもに与えっぱなしですむ方向に便利工夫され、孤独な密室的な玩具になる危険がある。

テレビ・コミュニケーションの効用には人間的な限界がある。個性の発見よりも記号化・通俗化が著しい。

紙芝居の原始的なコミュニケーションの方が子どもには体験的であり、演技者も反応によって対処でき、そこに発見がある。

紙芝居の演技は難しいようだが、しかし誰でもが始められる。子ども自身も友だちに対して行え、更にストーリーをつくり絵をつけることもできる創造的な遊びである等、等ということになろうと思う。そして私にとって楽しみなのは児童文化が芸術性よりも人間性に重点を置くことによって、再び地域が人間にとって重大なものとなり、生きた環境が、なつかしい〝我が町〟が文明国に復活することが、紙芝居をひとつの契機としてありはしないかと想像してみることなのである。（終）

母のひろば　48・6・15　第3種郵便物認可

つくり＊つくる＊つくれ
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ のぞむものを

川北りょうじ
（児童文学作家）

ラッシュアワーの新宿駅は、いったい何百万の人たちが行き来するのだろうか。混雑するホームの上から、ぼくは階段を見おろす。うつむきかげんの顔が、帯のようにつづく。笑顔を忘れた人の群れ。そんな光景の中にいると、

——むなしいじゃないですか、こんな世の中なんて。

かぼそい声で、ぽつりとつぶやいた男を思い出す。赤ちょうちんがゆれる、露地裏の小さな飲み屋で、男は一人で杯をかたむけていた。

——むなしい、悲しいって、死ぬまでつぶやきつづけるなんて、ぼくはまっぴらですよ。

酔った勢いで、見ず知らずの男に声をかけると、

——……若いよ、君は。でもなあ、世の中っていうのは、君が考えてるほど、そんなに甘くはないんだ。私だって少し前までは君と同じ気持ちだった。……

男は、ぼくの顔をのぞきこむようにして、しばらくだまっていたが、

——結局、どうにもなりゃしなかったんだよ。

ためいきまじりにいった。男の精気のない横顔を見ていると、ぼくはむしょうに腹が立ってしかたがなかった。

今思うと、あの時ぼくはどうして、子どもの頃のねんど遊びのことを話さなかったのだろう。ねんど遊びにかぎらず、軍艦やピストルを木ぎれでつくったこと、砂でトンネルをつくったこと、なんでもよかったのに。

もちろん、ぼくはどこかの無責任な世話好きがするように、子どもの頃の回顧ばなしをして男を元気づけようなどと考えているのではない。ぼくらはかならず、ぼくらの望むものを自分の手でつくったことがあるということ、そのことを話せばよかったと思うのだ。たとえ写真の軍艦を見ながら、まねをしてつくったとしても、それはまぎれもなくぼく自身の創り出した軍艦だったはずだ。ねんどでつくった怪獣にしても、レンガでつくった城にしてもそれは同じだ。自分の望むものを自分の手でつくり上げる。このすばらしい人間の行為は、ぼくの頭の中でますます輝きを増していく。

赤ちょうちんで出会った男は、この社会も人間がつくっていることを忘れていたのだろう。ためいきをつき、病人のような青白い顔をして、不本意な悟りをひらかなくてもいいのだ。ぼくらの望まない社会であれば、ねんどをこねなおすように、

ふにふに　むにょらっ
べちべち　どん

ぼくら自身の手で、つくりなおせばいいではないか。たいへんなことだけど、とてつもなく楽しい遊びのように思えてならない。

（カットは福田庄助・画『ふにふにむにょらっ』より）

☆ 童心社の幼年絵童話 ☆
川北りょうじ・文福田左助・画
ふにふにむにょらっ
アノコは、ひっしで、ねんどをつくる。モデルのねずみが、ぶたにになる。ねんどのぶたは、おおかみに……あれっ、でっかいぞうが、やってきた！
子どもの創造性を、力いっぱい、リズミカルにうたいあげた、新しいファンタジー　■600円